



TITLE:

質疑應答

AUTHOR(S):

CITATION:

質疑應答. 地球 1931, 15(1): 81-82

ISSUE DATE:

1931-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183852>

RIGHT:

地廣闊な地理的事情にのみ歸すべきものでなくて、人文上の原因によるものであらうと考へる。

つぎに六大都市の世帯及人口數をかゝげる。

	世帯數		人口	
	男	女	男	女
大阪	五〇、〇三三	一、三三、八六六	一、四九、七三三	一、四九、七三三
東京	四四、六〇〇	一、一七、七七七	九四、七三三	九四、七三三
名古屋	一五、三六九	四七、〇六六	四七、〇六六	四七、〇六六
神戸	一六、三七七	四六、三五四	三八、五二一	三八、五二一
京都	一五、〇七五	三六、七六六	三八、四六六	三八、四六六
横濱	一五、九二九	三三、四七五	二六、八八八	二六、八八八

(昭和五年十月一日現在、十二月八日速報)

○兵庫縣栗栗郡三方村の栗

栗が最近米國へ輸出されて好評であるのみでなく、支那栗や朝鮮栗が輸入される勢に見て兵庫縣の三方では今度各戸に丹波栗五十本づゝを最寄の空地に植付け十ヶ年後に七百石以上の生産を期してゐる、三本を一坪の割合で各戸五畝歩づゝを全村五百戸にわち二十五町歩の栗林に二萬五千本を仕立て、五ヶ年後から實を採集し、十年日には平均一本三升の栗がとれる、一升五十錢と内輪に見積つて一戸平均一石五斗、七十五圓の收入とする、全村七百五十石、三萬七千五百圓の收入を得やうといふのである、これは勘定どほりにうれるかどうかはわからぬが、農村の参考と思つてこれをするす、丹波では既に栗林で二三百圓の收入をあけてゐる家は數が多い。

質疑 應答

○贛南のタングステン

江西省の南の方からタングステン鐵が出だしたのは民國四五年の頃で、六、七年には公司各所に簇出し裕豐公司の如きは資本四十萬元を擁し鐵砂の運送販賣に當り、華南華盛等の公司は技師を招聘し發見鐵區三十餘箇所に達し七、八年の頃には一ヶ月の輸出四百餘萬元となり、江西及廣東商人は總て公司を組織したが大戰の後暴落したけれども土民は依然探鐵をつづけ民國十年海外のタングステン市價回復に乘じ廉賣したので業務は再び股盛となつたしかし革命のために十六年には一度沈滞したが最近は稅局を贛州及大庾の二箇所に設け密賣をふせいでゐる、贛南縣の龜尾山を第一の產地とし大庾崇義二縣々界の諸山脈が之につぐその産業は一一七、六五〇擔に達し、一擔の價十一元九十一仙見當にして、産地上海間の運賃税金其他十二 一角二分を要するから上海では一擔につき二十四元になる(一噸四百〇四元餘)

質疑 應答

問 中央アジアの交通と住民及産業

答 鐵道はもと中央アジア鐵道及タシケント鐵道であつたが、今回ノボシビルスクに達するトルクシブ鐵道がついたから交通上の面目を一新しかけてゐる、ことにこのトルクシア線の支線を支那新疆省にむけて、一は露支國境のザイサン

一はチユーグチャク、一はアルマアタより伊犁に通ぜんとするものゝ如きは、この方面に於て注目すべき計畫である。

太古以來支那と歐洲との交通は天山北路及南路によつたもので、北路にはジュンガリー門がある、支那は自國の領土内であるにも不拘、新疆省中の都市に自國領事をおいてゐる、それは露國との關係が深いからであつて、露支國境方面にはソウイェットの税關が多く、イルケシタム、ナルイン、カラコール、コリジャツト、ホルゴス、バブトイ、サイサン等七ヶ所に達する。

航空路としては

アルマアタ——セミ巴拉チンスク

タシユケント——ジュシヤンベ

ジュシヤンベ——クリヤア

モスコウ——タシユケント

タシユケント——カプール

の間に運用されてゐる。

住民 中央アジアの民族の基礎はタジク人である、この民族は深目隆鼻でイラン族であり、波斯人に屬し、中央アジア唯一の白人系統である、遊牧民の跳梁に堪えずして山間避地にのがれ、萎縮しつつも、他の民族と混血することが少く今日に及んだ、言語は古代波斯語である、回教徒を信じ婦人は覆面しないものが多い。

ウズベク人は数が多いと同時に有力であるが、蒙古族とい

ラン族との混血によりて生じたチユールク族であつて、言語はトルコ語に似たジャガイ語といふのを用ひる。

トルコマン人も同じくチユールク族であるが、如何にしてこの民族が出来たかは不明である、キルギス人も同じく混血で、トルコ語に近い語を用ひる。

産業

河川灌漑の行はれる所には農業が行はれ棉花の産が多い、これはソウイェットの獎勵する所で外棉輸入防壁の積であるが、人民は米食を愛するから、米を作くらずして棉をつくれといふ政治には反感をいだく、但し苗代をつくらぬからたゞ古來の撒蒔である、雜草も取らぬために收穫率は我國の低位の水田の普通作から見ても二分一に達しない。一反に一石内外の作である。

又古から養蠶國であつたが目下大に増殖をはかつてゐるが桑畑の良いのがない。

いづれにしてもこの國では灌漑が先登に立つ。古くから之に注意したのが最近ツラフミヤン河の新式灌漑を計畫し、三ヶ年計畫、千二百萬留で出来上つた、その結果八十萬ヘクタールの耕地が出来た。

ロシアは灌漑のために農民から料金をとるに際し、集團經營者には特典を與へ、個人農は甚しく不利の立場に置いてゐる、かくて農業の集合化をはかるといふのである。

何れにしてもこの方面が目下着々と新機運に向つてきたことは確實であり、支那の西方漸く天下の耳目をひかんとするに至つてゐる、之を日本人の滿洲經營の退嬰的なるに比して學ぶべきものがあらうと思ふがどうであらう。